

寅彦本・装幀違いの楽しみ

四宮 義正

寺田寅彦が生前刊行した随筆集には趣のある自装本が多数ある。小林勇は寅彦から「僕は装幀が楽しみだから本を出す」と笑いながら言われたそうである。(昭和 11 年版寺田寅彦全集月報第 11 号)

藪柑子集、冬彦集、続冬彦集、蒸発皿、触媒、蛍光板などの表紙に使用する布の吟味に労を惜しんでいない。鐵塔書院刊の「萬華鏡」は小林勇に例として示した手書きがそのまま使われてしまった。流石にこれには困ったようで再版では違う装幀になっている。

没後も多くの著作が刊行されているが版を重ねるうちに表紙が変わったり、普及版と特装版が一緒に出たりしたものがあり興味深い。ここではそのうちの三件について紹介する。

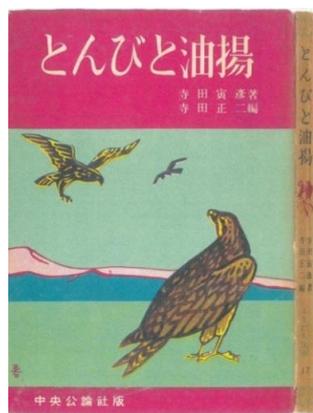
1. とんびと油揚

中央公論社から子供向け「ともだち文庫」シリーズの一冊として寅彦の二男である寺田正二編集で発行された。奥付による刷の履歴は下記の通りである。

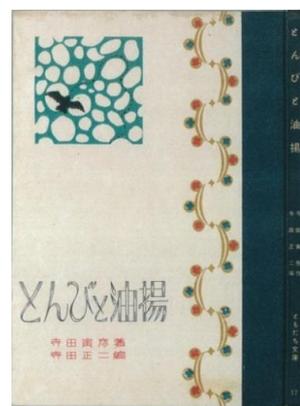
昭和 22 年 11 月 10 日初刷発行 定価 30 円、昭和 23 年 5 月 5 日 2 刷発行 40 円、昭和 23 年 10 月 5 日 3 刷発行 60 円、昭和 24 年 3 月 10 日 4 刷発行 70 円、昭和 25 年 8 月 15 日 4 刷発行 (5 刷の間違いと思われる) 90 円。1~4 刷は並製、5 刷は上製角背、薄紙の継ぎ表紙。



昭和 24 年版表紙



昭和 25 年版表紙カバー



昭和 25 年版本体表紙

本文はどの刷も同じで最初に編者である寺田正二の「まへがき」があり、収載作品は茶わんの湯、藤の実、とんびと油揚など 11 編 106 ページである。初刷の表紙は全体に黄色っぽく、羽を広げた茶色の鳶が川の上空を飛ぶ姿が描かれている。絵の作者名は書かれていないが目次の後に挿画村上正夫とあるので同じ人と思われる。横書きで寺田寅彦著とあるだけで編者の名前は書かれていない。2 刷から 4 刷までは同じ表紙であるが作者名の下に寺田正二編と追記されている。

5 刷になると表紙カバーが付いて全く異なる装幀である。カバーは上部が赤ベタで書名と著者名が白抜き文字で書かれている。中央部には羽を休めて上空を見あげる鳶と空に舞う二羽の鳶が描かれている。本体表紙は下側に白抜き文字で題名があり赤で著者名と編者名が書かれている。上左部に鳶が臭いを感知している様子が描かれているが白い部分が多い。

表紙の絵の作者名は特に書かれていないので同じ村上正夫と思われる。しかしカバー絵をよく見ると左下に小さく「春」の文字があるので違う人のサインかもしれない。

なお寺田正二はドイツ文学者ヴィルヘルム・ハウフ作「小人の鼻吉」を翻訳してこのシリーズの一冊としている。

2. 寺田寅彦郷土随筆集

寺田寅彦の郷里である高知市で二度にわたって郷土随筆集が編まれている。

①昭和 32 年版（寺田寅彦顕彰事業後援会発行）

郷土関係作品 26 編 242 ページと注解 21 ページである。寺田寅彦邸や高知城周辺、家族など貴重な古い写真が巻頭 12 ページにわたって掲載されている。



普及版表紙カバー



特装版本体表紙

a) 普及版 昭和 32 年 12 月 30 日発行、並製。

杉田八太郎装幀のカバーが付いている。全体に青っぽく、木の枝がデザインされた絵があり、下部に中谷宇吉郎『百日物語』所収の「寅彦の遺跡」が裏から表へ引用されている。

寅彦の遺跡は、建物や銅像の形ではなく、人々の心の中にある。

寅彦の郷土随筆集の編集の方たちと、まる一日車を走らせたが到ところで、若き日の寅彦の像がこの人たちの頭の中に蘇ってくるのに、むしろ驚嘆の念を禁じえなかった。

高知城の石垣のほとりには『花物語』の昼顔が今日もやはり咲いている。小学生の寅彦が「母にねだって蚊帳の破れたので作った」捕虫網を肩にして、この城山の奥の、苔むした石段を下って来る。常山木の幹でとらえた見事な兜虫はいかめしい角を立てて虫籠の中にいる。そして美しい蝙蝠傘をさした母子に会うのは、この石段の下である。

街を一步出ると、青田がずっとつづいている。そして、『冬夜の田園詩』も民族的記憶の名残を止めた「キータヤーマ・ヤーケタ」の北山が、その向うに、昔ながらの姿を見せている。

『竜舌蘭』の家は、今は全く昔の面影もないそうである。唯一つ残っているものは、病身の寅彦が「体が段々落ちて行くような何とも知れず心細い気が」して眺めた「天井に吊るした金銀色の蠅除け玉」だけである。しかし寅彦を愛する人たちには、この蠅除け玉が一つ、昔のままに天井から吊り下がって居れば、それですべてが残存

しているのである。

こういう遺跡は、永くは残らないかもしれない。しかし、千万斤の石で作った遺跡とて、同じことである。

寺田寅彦顕彰のあり方を余すところなく伝えている。流石に寅彦の一番弟子であり、もっともよく寅彦のことを理解していた人だと思う。

本体表紙は紙製で題字が書かれているだけである。奥付に定価の記載はないがカバーの背に¥150と書かれている。

b) 特装版（非売品）昭和 32 年 9 月 10 日発行、上製丸背。

本文、あとがきとも普及版と同じである。「あとがき」に装幀について書かれている。

特製本表紙には、古くから地縞と称して賞用されている木綿の田舎縞（製作は岸本町浜田光太郎、芸西村西分吉田義彦両工場）を用い、帙の用紙には土佐産の三極の純粋繊維で、場長高橋亨氏の好意によって、県立紙業試験場で特別に漉いたものを用いた。巻頭の写真は伊野部家、山本家所蔵のもの以外は高知新聞社の青山茂氏をわずらわし、題字は福原芸外氏の筆になる。

福原芸外は「云外」の誤りと思われる。云外は書家であり江ノ口小学校の寺田寅彦顕彰碑の題字も書いている。平成 21 年に 92 歳で亡くなっている。

この「木綿の田舎縞」について図書館などで実物を確認したところ、意外にも多くの模様があり、9 冊確認して 5 種類を数えた。どれを見ても木綿の落ち着いた縞に銀泥の題字が栄え、時代を経てとても落ち着いた重厚な趣がある。特装版が何冊作られて、木綿の柄が何種類あるのか知りたいところである。

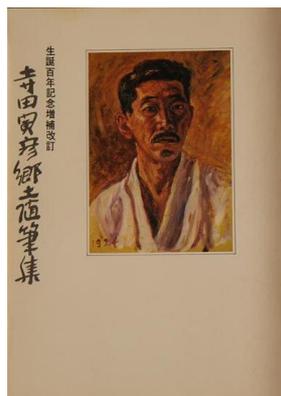
浜田光太郎の工場は民芸品などで親しまれた土佐紬を生産していたが平成 10 年に惜しまれながら閉鎖されたようである。

土佐和紙の帙は題字が書かれているだけで絵などは描かれていない。

②昭和 53 年版（生誕百年記念増補改訂版）（昭和 53 年 11 月 28 日高知市教育委員会発行）

昭和 53 年の寺田寅彦生誕百年を記念して 36 編から 52 編に増補し注解も大幅に増えている。カバーデザインは黒田矩彰、題字は福原云外の昭和 32 年版を踏襲している。寅彦のカラー自画像のある白色表紙、カラー水彩画「花瓶と花」の裏表紙になっている。

巻頭に寺田東一「再刊に際して」が置かれ、本文と注解で 331 ページである。



普及版表紙



特装版本体表紙

a)普及版、小口折り製本。

カラー自画像と水彩画の表紙と一体型製本になっている。定価の記載は無いが 1000 円で販売されたようである。

b)特装版、上製丸背。

普及版と同じカラー自画像と水彩画のカバーが付いている。本体表紙は青っぽい縦縞の布に銀泥で題字が書かれている。あとがきには特装版について特別な記載がない。奥付も普及版と同じであり、発行部数や非売品かどうかなど知りたいところである。

3. 珈琲哲学序説（豆本）

いなほ書房の星田宏司氏はコーヒー文化についての研究者で著書も多い。寺田寅彦の珈琲哲学序説を豆本に仕立てて繰り返し出版している。

a)珈琲哲学序説 1988年2月25日、いなほ書房、装幀星田宏司、版画関根寿雄（70×50mm）46ページ、限定75部番号入り、布装上製箱入り、外箱付（箱、外箱とも無地）

b) 同上 ただし、箱、外箱にコーヒー豆のイラストのある題簽貼付け。

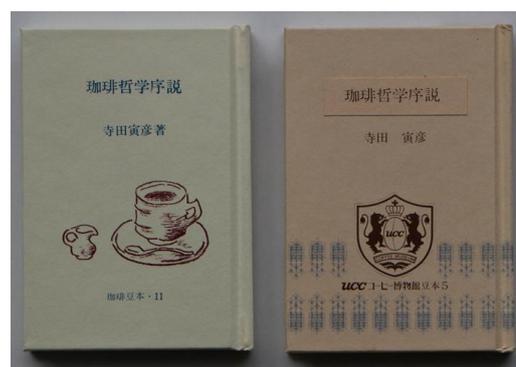
c) 珈琲哲学序説（銀座アルプス併録）珈琲豆本・11 1989年9月30日、いなほ書房（98×65mm）90ページ、並み300部、上製、コーヒーカップの描かれたカバー付。定価1000円。

d)同上 特製100部（85×65mm）布装上製箱入り、外箱付、発行日と本文はc)と同じ。箱、外箱にc)のカバーと同じ題簽貼付け。

e) 珈琲哲学序説（銀座アルプス併録）UCC コーヒー博物館豆本5 発売元UCC コーヒー博物館、発行所いなほ書房、上製、UCC コーヒー博物館のイラストが描かれたカバー付。発行日及び寸法、本文はc)と同じ。定価1000円。



b)のセット



c)と e)の本体表紙

なお、c)の星川宏司の解説によると a)と b)は洋本装幀であり、別に和本装幀が 75 部発行されたとのことである。（筆者未見）

（附記）この稿の書籍を調査するにあたり、高知県立図書館、高知市民図書館、寺田寅彦記念館、高知県立文学館、北海道立図書館、神奈川近代文学館、熊本県立図書館、中谷宇吉郎雪の科学館のお世話になりました。ありがとうございました。